2023年11月26日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

どん底に横たわる神様

［イザヤ書53章1節～8節］

わたしたちの聞いたことを、誰が信じえようか。主は御腕の力を誰に示されたことがあろうか。
 乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のように／この人は主の前に育った。見るべき面影はなく／輝かしい風格も、好ましい容姿もない。
 彼は軽蔑され、人々に見捨てられ／多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し／わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。
 彼が担ったのはわたしたちの病／彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに／わたしたちは思っていた／神の手にかかり、打たれたから／彼は苦しんでいるのだ、と。
 彼が刺し貫かれたのは／わたしたちの背きのためであり／彼が打ち砕かれたのは／わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって／わたしたちに平和が与えられ／彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。

わたしたちは羊の群れ／道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて／主は彼に負わせられた。
 苦役を課せられて、かがみ込み／彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように／毛を切る者の前に物を言わない羊のように／彼は口を開かなかった。
 捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか／わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり／命ある者の地から断たれたことを。

[1]　イソップの物語の、カエルが求めた王様

今日ご一緒に開き、聴いている御言葉は、預言の書「イザヤ書」の頂点というだけでなく、聖書全体の頂点と言われる御言葉です。これは驚くべき言葉です。私たちがもともと持っているような神観とかメシア観というものをひっくり返す神様の言葉だと思います。

イソップの物語（紀元前5世紀頃？）にこのようなものがあるそうです。

昔カエルの国があって、カエルたちは好きな時に沼地で泳いだりケロケロ歌いながら、仲良くおだやかに暮らしていました。しかし一部のカエルは「こんなに平和に呑気に暮らすなんてダメだ、この国に強いリーダーが必要だ」と考えて、カエルたちは「強い王様を与えて下さい」と天の神様に願います。神様は今のままの方が平和でいいのにと思ったけれども、そう願うので与えたのが、丸太大王。大きくて立派に見えるけれども、何にもしない丸太では飽き足らなくなってしまって、もう一度、神様にお願いをします。そのようにして二度目に現れたのはコウノトリ大王でした。カエルたちは、このコウノトリこそが立派な王様だ、強いリーダーだ、良かった、これで安心だ、と思っていた所、このコウノトリは、パクリそしてまたパクリと、カエルたちを次から次に口に入れてしまって、遂にカエルの国はなくなってしまった、というお話です。

（A・ビナード、スズキコージ『**ポチャッ　ポチョッ　イソップ**』より）

平和よりも、強いリーダーシップを求めていく落とし穴、危険性が描かれていると言えると思いますね。…それにしてもなぜ人は「強さ」というものに憧れるのでしょうね？私たちはいつの間にか「らしさ」というものにがんじがらめにされている所がるのではないかと思います。「男らしさ」「女らしさ」というのはその典型かも知れませんね。そしてそれは教育されてきてしまっています。「男らしく強くあれ」「女らしく優しくあれ」。そして多くの価値観は、弱い人間ではなくは強くなること、貧しさではなく豊かになること、病気を抱えることではなく、健康で過ごすこと、それが「善」とされています。それが「幸せ」のかたちだと思ってしまっているのです。そしてその究極が「神様」に当てはまるんです。私たちが信じるに値する神様は、どこまでも力ある強い方、何でもお持ちの豊かな方、病気など知らない不老不死のお方、それが神様の「イメージ」です。それは、現実の私たちがそうではないから（実際には強くはないし、豊かなく、欠けだらけですし、病気で苦しみことがありますから）、神様というお方は私たちが抱く「完全」な方、ということになります。でも、それは「偶像」と言えるのではないでしょうか？偶像は、自分の願望の投影です。そして、いつしか自らもより強い者、より力ある者にならなければという価値観を抱いてしまいます。先ほどのカエルの話のように、自分自身を失って行ってしまうことになりかねません。そのように、私たちは、いつの間にか良かれと思いながら刷り込まれた価値観があって、本当にありのままに人や自分を見つめること、愛することが出来なくなってしまっているのではないか、そんなことを思います。

[2] 受身形のメシア

そういうことを考えていくと、このイザヤ書53章で語られているメシア（救い主）像は、どんな人間も、また他の旧約の預言者も想像だにしなかった救い主の姿が描かれていると思います。イザヤ書52章の12節から始まっていますが、そこに「わたしの僕」と書いてあります。神様ご自身が時至って遣わされるメシアのお姿です。“力にあふれた”メシア像とは正反対です。53章の2節からもう一度味わってみたいと思います。

　「この人は主の前に育った。見るべき面影はなく／輝かしい風格も、好ましい容姿もない。 彼は軽蔑され、人々に見捨てられ／多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し／わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた」。

「彼は軽蔑され、人々に見捨てられ」とありました。受身形で書かれています。されるがままの奴隷のようです。そうです。“神様の奴隷”です。人々から捨てられたとありますが、それを許されたのは他ならぬ神ご自身です。そしてこのメシアは、「多くの痛みを負い、病を知っている」と言います。ここは受動態ではないです。あるがままの彼の姿です。痛みを身に負い、病気の辛さも知っている、そういうメシア。以前の訳では「多くの痛みを負い」は「悲しみの人で」となっていました。人間の悲しみを彼は知っているのです。それは彼の「使命」に繋がっています。4節でハッキリとこのように言っています。―「彼が担ったのはわたしたちの病／彼が負ったのはわたしたちの痛みであった」。５節ではこうあります。「彼が刺し貫かれたのは／わたしたちの背きのためであり／彼が打ち砕かれたのは／わたしたちの咎のためであった」。ここでも「刺し貫かれた」「打ち砕かれた」と、受身形で書かれています。彼はじっと、それを受けているのです。いわゆる“神様らしい”力をここで発揮して敵をやっつけるということをしない。何故でしょうか？それは私たちの背き、また私たちの咎のため、つまり私たちの罪を負うためだとイザヤ書は語っています。

　7節以下のこの「主の僕」の姿、これは正に新約聖書が証しているイエス・キリストでなくて何でしょうか。―「苦役を課せられて、かがみ込み／彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように／毛を切る者の前に物を言わない羊のように／彼は口を開かなかった。捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか／わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり／命ある者の地から断たれたことを」。

彼はいけにえの小羊になられたのですね。「いけにえの小羊」は、神様との関係を回復するために人間が用意する宥めの供え物です。羊は横たわり、屠られます。そして火にかけられます。その燔祭が焼かれるかぐわしい香りを神様は受け止められて、人間の罪は許されます。横たわったいけにえがいるからです。そのいけにえの小羊を、人間ではなく、神ご自身が用意された！それがイエス・キリストであると聖書は証しているのですね。私たちはこんな救い主を知りませんでした。イザヤが言う通りです。―「彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか／わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり／命ある者の地から断たれたことを」。

私たちがこうあってほしいと願う神様ではなかったのです、イエス様は。ですからこれは躓きでした。しかし、彼が神の小羊となって屠られなければ、私たちの世界と私たち自身は、真の安らぎ、真の平和を得ることは出来ないのです。これは神様の深い深いご計画でした。5節の後半にはこのように記されていました。―「彼の受けた懲らしめによって／わたしたちに平和が与えられ／彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。わたしたちは羊の群れ／道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて／主は彼に負わせられた」。

　[3] 私たちに対するチャレンジ

 私たちは、来週から、この救い主が誕生されるクリスマスを待つ時（アドベント）を迎えます。本当に感謝な時です。と同時に、この主イエスの十字架に至る生きざまは、私たちにチャレンジを与えているように思います。主はこの世界のどん底の中に、私たちのあるがままの姿の中に来て下さったのです。罪びとであるあるがままの私たちを赦し、愛するためです。「もっと力を持ちたい」と思って、かえってそれに縛られてしまうことが多い私たちなのかなと思います。そして、優越感がくすぐられる。しかしその延長線上にあるのが「戦争」ではないでしょうか。でも、絶望しないで生きて行きたいと思います。この世界の真ん中にはキリストがおられるのです。私たちは、彼に聞き、神様の愛に押し出されて、自分と他者をありのままに愛し、弱くても、病があっても、どんな中にあってもあなたを見上げ、歩んで行きたいと思います。「彼の受けた懲らしめによって／わたしたちに平和が与えられ／彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた」。お祈り致します。

神様、今日の礼拝を感謝致します。聖書にこのイザヤの言葉が与えられていることは奇跡です。自分では本当の平安を作り出すことが出来ず、自己の力に頼ったり、権力にすり寄るような生き方に傾く私たちです。しかし、主イエス様、あなたは十字架にお架かりになり、あるがままの私たち、罪びとの私たちを愛して下さいます。どうか、クリスマスを迎えようとするこの時期、もう一度あなたの愛を全身で受け止め、苦労があり、病があり、試練がある人生ですが、その中に神様の平安を満たし、共に愛し合いながら歩んで行くことが出来ますように導いて下さい。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。